

ミドルング・ソートと「救貧」意識

— ブリストル救貧社に見る意識の変化 —

Middling Sort and Poor Relief: The middling Identity in the Bristol Corporation of the Poor

和田 将 幸

The definition of “middling sort of people”, which was business class in the seventeenth- and eighteenth-century Britain, is still vague. Partly the ambiguity of “middling sort” is due to the lack of legal or economical definition, so the key concept of “middling sort” is considered to be their own identity.

The purpose of this paper is to examine their “middling” identity in Bristol Corporation of the Poor, which founded by business class at the end of seventeenth-century Bristol. The idea for the poor relief of the founder, was different from the one of the traditional classes.

Masayuki Wada

JEL : N00, N13, N33, N93

キーワード：ミドルング・ソート, ミドルクラス, 中産階級, ブリストル, 救貧法, ブリストル救貧社

Keywords : middling sort, middle class, Bristol, poor law, Bristol Corporation of the Poor

1. はじめに

17 世紀後半から 19 世紀にかけてのイギリス社会において、その「中流」¹⁾

1) 本稿では、“middling sort” の邦語表現として「ミドルング・ソート」との表記を用いている。邦語で社会史研究を扱った文献の中には“middling sort”の訳語として「中流層」「中産層」と表記しているもの、また「ミドルング・ソート」との表現を用いているものがある。「中流層」という語については、多くの社会史関連の邦語文献で用いられているが(例えばライトソン [1991])、必ずしも語義に厳密な定義を持たせずに用いている場合も多い。社会史研究において、特にある

をいかに捕捉するのかという問題は、社会史・経済史を含む歴史研究において問題であり続けている。現在の歴史学の到達地点が、「ミドルクラス」は地域的・文化的多様性の中で 19 世紀前半までに徐々に形成されてきたと理解している一方²⁾、17 世紀末から 18 世紀にかけての「社会の中流」は、「ミドリリング・ソート (middling sort)」として概念化が進められてきた³⁾。この「ミドリリング・ソート」については、未だにいくつかの問題が残されている。それは、「ミドリリング・ソート」が社会的な凝集性を持った集団だと言えるのかどうかという点について、またさらに、それが何らかの集団としての一体性を持っていたとしても、その一体性がどのように形成されてきたのかという問題である。

「ミドリリング・ソート」の概念化については、いくつか研究史上の潮流がある。一つは、社会階層の変遷を扱う社会史研究であり、中でも当時の文献の用語法の中から中流の存在を推定しようとしたものである。キース・ライトソンによれば、1640 年代には当時の用語法の中に「中流の人々 (middling sort of people)」という語が定着していたとされている⁴⁾。用語法の分析から析出さ

種の文化的な特徴や共通の意識を持つ「地域の主要な住人」としての“middling sort”を論じたものとしては、Barry (1996) が特に重要だが、このような厳密な意味の元で“middling sort”を論じる場合、「ミドリリング・ソート」という表現が用いられるか (バリー, ブルックス [1998])、もしくは「中産層」との訳語が用いられている (関口, 梅津, 道重 [1999])。後者の「中産層」という語は関口, 梅津, 道重 (1999) 以外の文献では使われておらず, “middling sort”の訳語として「中産層」は未だ十分な合意を得ている状況にないと思われる。このため、本稿ではバリーの訳書にならない“middling sort”を「ミドリリング・ソート」と表記することとした。

- 2) ミドルクラスについては、歴史学において長い研究史があるが、比較的近年、幅広く議論をまとめたものとしては Kidd & Nicholls (1998), Kidd & Nicholls (2000) を挙げておく。また, “middle class”という語については「中産階級」との訳語があるが、近年の多くの著作では「ミドルクラス」との表記が用いられている (例えば長谷川 [1996], 岩間 [2008])。「中産階級」から「ミドルクラス」への表現の変化について明確な意味づけをしている文献は見られないが、長谷川 (1996) が論じるようなミドルクラス概念の変化がこれに影響しているのは間違いない。本稿は直接にミドルクラスについて論じるものではないが、社会層の形成について、経済規定以外に多くの要因があったと認める点では長谷川らの立場と共通している。このため、本稿でも“middle class”の邦語表現として「ミドルクラス」との表記を用いることとした。
- 3) 「ミドリリング・ソート」については、Barry (1994), 関口, 梅津, 道重 (1999) が代表的な研究としてあげられる。
- 4) Wrightson (1994), p.55.

れてきた「ミドルリング・ソート」は、その地域内の上流階層や下流階層と異なる文化的・社会的特質をもっていたことが明らかにされるにつれ、その特質をもって一つの意義ある階層として理解しようとする問題意識のもとで概念化されてきた⁵⁾。ある種の社会的・文化的特性の違いを境界線に概念化が進められてきた「ミドルリング・ソート」は、「独立して商売を営む世帯」であるとの定義はあるものの⁶⁾、基本的には職業によらず分類され、文化的に上流階層や下流階層と異なると認識されていたどうか、またその地域社会の「主要な住人 (chief inhabitants)」であるかどうかが要件であるとされた⁷⁾。ジョナサン・パリーが「つかみどころの無さは、この階級固有の特性である」と述べたように⁸⁾、地域によってその社会の「中流」となる人々が異なることは、「ミドルリング・ソート」概念を把握することを困難にしてきたと言える。しばしば言及されるように、「ミドルリング・ソート」と「ミドルクラス」の違いが、自らその階級に属するものとしての意識の有無にあるとすれば⁹⁾、いかにしてそのような自己認識が形成されたのかを解き明かすことは、「ミドルリング・ソート」の性質を理解する上で、また「ミドルクラス」への連続性を検討する上で、重要な意味を持つだろう。

17世紀の後半から18世紀半ばにかけて成立した「ミドルリング・ソート」が、どのような性質を持った集団だったのかを明らかにしようと試みた研究は、それに都市と農村、地域によってかなりの差があることは前提としても、既にいくつかの地域研究によって明らかにされつつある。ロンドンのミドルクラスを取り上げた論者として代表的なピーター・アールの研究によれば、ロンドン

5) Barry (1994), pp.22-25. またこうした問題意識の元に「ミドルリング・ソート」を明らかにしたものとして、Barry (1996)。

6) Barry (1994), p.4.

7) 「ミドルリング・ソート」の「主要な住人 (chief inhabitant)」という定義については、French (2007) で詳しく議論されている。

8) Barry (1994), p.31.

9) ミドルクラスの定義について、経済的規定だけではなく政治、社会、文化的条件を重視したものとして、例えば長谷川 (1996) が挙げられる。また、階級の形成が経済的条件のみによるのではなく、日々の経験の中で徐々に意識形成されるものであることは、Thompson (1963) 以来広く論じられてきたテーマでもある。

では少なくとも 18 世紀半ばまでにミドルクラスの形成が確認できるとし、それはビクトリア期のミドルクラスとかなりの連続性をもっていたとされている¹⁰⁾。また同様に、ヨークシャー・ハリファックスを取りあげたジョン・スメイルによれば、同一の社会集団としてのアイデンティティは、ビジネス上の繋がりや地域の公職への参加、自発的結社 (voluntary society) などへの参加を通じて醸成され、18 世紀の後半までにそうした行動を通じた階級形成が見られるとしている¹¹⁾。

アールやスメイルが、18 世紀半ばまでに様々な意味で他と異なると認識されていた「ミドルクラス」が存在したと結論づける一方で、ヘンリー・フレンチによれば、「ミドリング・ソート」を「消費し、上品で、ファッショナブルで、ビジネスライクであり、そして分別あるブルジョアジー」として捉えるのであれば、そのような集団の存在は、18 世紀の第二四半期までにロンドン以外でもブリストル、ノリッジなどで見られたとし、そうした存在は「ミドルクラス」の持つ多くの性質を生みだしたとされているが、同時にそれは「ミドルクラスの単一の祖先ではない」とも述べている¹²⁾。フレンチが「ミドルクラス」と「ミドリング・ソート」の連続性について慎重な姿勢を取るのは、一つには 19 世紀の「ミドルクラス」に比べて「ミドリング・ソート」には政治的一体感に欠けているという事実にある理由がある。いずれにせよ、「ミドルクラス」と「ミドリング・ソート」の連続性の問題も、「ミドリング・ソート」の存在をさらに深く理解することで答えを得られる問題であろう。

本稿の目的は、17 世紀末から 18 世紀のブリストルのミドリング・ソートを取りあげ、それが集団としての階層意識を持つに至る過程を明らかにすることにある。「ミドリング・ソート」は、フレンチが詳しく論じたように、その地域内部での「中流」であるため¹³⁾、大都市では商工業者や専門職がその位置に該当する一方、農村部ではヨーマンや借地農経営者がそれに該当した。「ミド

10) Earle (1989), pp.332-336.

11) Smail (1994).

12) French (2007), pp.264-265.

13) French (2007), pp.30-32.

リング・ソート」が職業によって定義できず、全国的に統合された集団でないためにその政治的凝集性について議論があるのは主にこの特徴に起因するものであるが、地域社会において何らかの貢献をなし、労働者階層や貴族階層と異なる意識をもった集団を捕捉することは、それがミドルクラスとして全国的に統合される前の段階だとしても、社会史・経済史研究において意義ある視角と言えるだろう。17世紀後半のブリストルについて言えば、「ミドリング・ソート」は「市民意識 (civic identity)」を紐帯に17世紀のブリストルミドリング・ソートを分析したバリーが言うように、「専門職・富裕な商工業者から慎重しやかな職人までを含む」グループであったと思われる¹⁴⁾。

以下では、1696年にブリストルで設立された「ブリストル救貧社 (Bristol Corporation of the Poor)」の設立理念の中に、ブリストルのミドリング・ソートの中に芽生えつつあった公共意識と、それがもたらす階級認識の萌芽を検討する。

2. ブリストル救貧社

(1) ブリストルとブリストル救貧社

本稿で検討対象として取り上げる都市ブリストルは、イギリス南西部にある貿易都市である。18世紀初頭の段階で人口約20000人であり、これはイングランドではロンドンに次ぐ規模であった¹⁵⁾。また貿易が盛んな港湾都市であり、18世紀半ばまでは、植民地貿易と関連した大西洋貿易の一大拠点として繁栄していた。タバコ、砂糖などの植民地物産の市場を持ち、製造業では製糖、ガラス、造船、金属加工などの貿易に関連するものが盛んであった。ブリストルの海外貿易は、18世紀半ばに貿易量でリバプールに凌駕されるまでロンドンを除く港としては最大の貿易量を誇っていた¹⁶⁾。

繁栄の基礎を貿易に置く構造を反映してか、市長、参事会員 (alderman) といった都市エリート層には、貿易商、特に冒険商人組合 (Society of Merchant

14) Barry (1996), p.40.

15) Minchinton (1957), pp. ix

16) 大西洋貿易とブリストルの繁栄については、Morgan (1993) 参照。

Venturers) の役職経験者が多い¹⁷⁾。また、宗教的にも非国教徒、特にクェーカーが多かったことが知られている¹⁸⁾。クェーカーは救貧活動には積極的であり、こうした側面もブリストルでの救貧社の設立に影響していたものと思われる。また、ブリストルのクェーカーは、そのネットワークを生かして商人として活躍するものも少なくなかった。17 世紀から 18 世紀にかけてのブリストルで、代表的な商人一家として知られるゴールドニー家もクェーカーであった¹⁹⁾。非国教徒は 1673 年の審査法以降基本的に公職からは追放されていたが、ブリストル救貧社の理事の中には、トーマス・ゴールドニー (Thomas Goldney) 始め何人かのクェーカーの名前を見ることができる。救貧活動に熱心なクェーカーが、かなりの程度まで都市の救貧行政に関与していたことは間違いない²⁰⁾。

また、バリーによれば、17 世紀後半から 18 世紀にかけてのブリストルのミドリング・ソートはある種のブリストル市民としての意識を共有していた。それは商業に根ざす「美德と勤勉」をモットーとする市民アイデンティティ (civic identity) であり、専門職や富裕な商人から慎ましやかな職人層までを含むミドリング・ソートの中に共有されていたとされている²¹⁾。フレンチが指摘したように、ブリストルはロンドンに次いで最も早くミドリング・ソートが形成された都市の一つであり、それはある程度共通の自意識を生んでいたと言って良いだろう。

以上のような 17 世紀末から 18 世紀前半のブリストルにおいて、1696 年に「ブリストル救貧社 (Bristol Corporation of the Poor)」が設立される。これは、従来の救貧法に基づいた教区ごとの救貧行政に代わり、市内全域の救貧行政を担う目的で設立されたものである。しばしば触れられるように、16 世紀

17) Sacks (1991), p.166.

18) ケネス・モーガンは 18 世紀前半のブリストルについて、ジョン・エバンスの調査を引用して人口の 20%程度がクェーカーを含む非国教徒であったと推定している。これはイギリスの全体の平均の約 2 倍であった。Morgan (1994), pp.66-67.

19) ゴールドニー家については、Stembridge (1998) を参照。

20) ブリストルの都市エリート層が、コミュニティの商工業エリート層とその個人的結びつきの中で形成されていたことは Sacks (1991) も指摘している。Sacks (1991), p.167.

21) Barry (1996), pp.40-41.

に始まるイギリス救貧法、特に 1601 年のいわゆる「エリザベス救貧法」は、近代的な社会福祉制度の先駆けとされるものであった²²⁾。この法律は基本的には 1531 年のヘンリー 8 世の王令を引き継ぐもので、貧民を働けない者と怠惰ゆえに働かないものとのに分け、前者には最低限の給付を与え、後者はワークハウスへ収容して労働をさせた。この意義は、救貧税 (poor rate) を徴収する代わりに基本的な社会福祉制度を国家レベルで整備した点にあるが、施行から 100 年を経る頃にはかなりの制度疲労を抱えていた。救貧税の徴収やワークハウスの運営は基本的に教区単位で行われたが、多くの教区では十分な救貧税を確保できず、そのためワークハウスの待遇は劣悪だった²³⁾。イギリス各地でこうした救貧行政が問題になる中、1696 年のブリストルで初めて地域特別法によるコーポレーションという形で救貧社が設立された²⁴⁾。

救貧社の設立のための請願提出に、指導的な役割を果たしたのはブリストル出身の貿易商ジョン・キャリー (John Cary)²⁵⁾ である。キャリーは市長らとの連名で 1696 年 2 月に議会に請願を提出し、その年のうちにブリストル救貧社が設立される。設立された 1696 年から 97 年にかけて、救貧社の最も中核的な施設であるワークハウスが設立されている。1696 年に 100 名の少女を収容したホワイトホール・ワークハウスが設立され、翌年には 100 名の少年を対象としたミント・ワークハウスが設立された²⁶⁾。ワークハウスの運営はブリ

22) Slack (1988), pp.113-114.

23) ブリストル救貧社以前のワークハウスは、しばしば「恐怖の家」と呼ばれていた。小山 (1962), 106 頁。

24) 地域特別法に救貧社設立の動きは、ブリストルを嚆矢として他のいくつかの都市に広がった。Butcher (1932), p.2.

25) Oxford Dictionary of National Biography (ODNB) によれば、ジョン・キャリーは 1649 年ブリストル出身で、冒険商人組合の役員やブリストル市議会議員を務めた後、1698 年には国会議員に立候補している。貿易や救貧についての多くのパンフレットを残しており、ブリストル救貧社の設立に関わった後には議会の要請でアイルランドに渡っている。

26) ただし、ミント・ワークハウスはキャリーの構想が完全に反映されたものとは言えない面もある。ミント・ワークハウスは当初少年のための労働・教育施設とされたが、少年以外にも様々な貧困者を受け入れ、後に Hospital と改名される。これは理事の一人ジョン・ハイン (John Hine) の反対によるものであったとされている。Butcher (1932), pp.5-6.

1709 年には 100 名の少女はミント・ワークハウスへ移され、ワークハウスはミントに統合される。

ストル救貧社の最も重要な活動であり、そこでは労働と共に教育が行われた。「ワークハウス」と呼ばれるものは過去の救貧行政の中でしばしば設立されていたが、長期にわたって維持されたのは初めてであった。ブリストルに設立されたワークハウスでは、「牛肉、エンドウ豆、ジャガイモ、スープ、おかゆ、パンとチーズ」²⁷⁾といった食事を始め衣食住が用意され、一日 10 時間前後の労働と教育がなされた。また「天気の良い日には、教師とともに丘に散歩に出かけることもあった」²⁸⁾。キャリー自身「これを新しいワークハウス (new work-house) と呼ぶ」と書いたように²⁹⁾、ワークハウス内で読み書きから紡績に関する技術教育までが行われたことは、ブリストル救貧社のワークハウスの最も重要な特徴であった³⁰⁾。他方、「働けない者」と判断されたものに関しては、1718 年以降は各教区担当の 4 名の理事のうちの一人 (pay guardian) が給付を専門に担当するようになり、院外救済が実施されている³¹⁾。

救貧法の歴史の中でしばしば取り上げられる救貧社だが、その意義については、ブッチャーによる評価を始めとして、福祉政策上の成功であったと見る向きが多い³²⁾。またブリストル救貧社については、本邦でもしばしばその多様な意義について注目されている。名誉革命後の地方と中央の政治的動揺の中で行われた「モラル・リフォーム運動」との関連で捉えた坂下史の業績や³³⁾、福祉行政の中でワークハウスの改善への意義に注目した井上克洋の研究³⁴⁾ などがある。また、ブリストル救貧社の特徴はその理念が従来のものとは大きく異

27) Cary (1700), p.12.

28) Cary (1700), p.11.

29) Cary (1700), p.5. また、当時のパンフレットからはワークハウスを「養成所 (nursery)」と記述している例もある。anonymous (1711)。

30) ワークハウスの設立にあたって、取容者に紡績を教える者、読み書きを教える者がそれぞれ別個に雇用されている。また、その他ワークハウスのスタッフとして雇用された者は、全体の管理にあたる者、給仕係（ただしこれはすぐに取容者自身で行うように変更された）、医者である。Cary (1700), p.10.

31) Johnson (1826), p.60.

32) Butcher (1932), pp.2-3. 地域特別法による救貧社設立がその後いくつかの都市で続いたことから、ブリストル救貧社は救貧行政における一つの成功であったと見なす向きが多い。

33) 坂下 (1997)。

34) 井上 (2006)。

なっていた点にあるが、この点については、基本的には革命以後のトーリーとホイッグの違いによるものと理解する見解が多い³⁵⁾。実際、救貧社がホイッグ主導であり、キャリー自身が強力なホイッグ支持者であったことは事実であろう³⁶⁾。

救貧社の設立の最も大きな意義は、既述のように各教区の権限を縮小し、市内の救貧行政と救貧税を救貧社に一本化した点にあるが³⁷⁾、その「救貧」の方法も従来とは大きく異なっていた。このことはそれまで救貧行政を担っていた各教区の教区委員 (churchwarden) と救貧監督官 (overseer) を中心とした集団の反発を招くことにもなった。この点については後に詳しく触れたい。

(2) 組織、財務

救貧社は、市長が兼任した理事長 (governor) と副理事長 (deputy-governor)、会計 (treasurer) の下に、各教区から市参事会員 (alderman) が推薦した 4 名の理事 (guardian) が運営を担った。キャッスル教区と市外の教区を除く 12 教区から選出された 48 名の理事が救貧社の中心であり、この 48 名の中から 12 名の助役 (assistant) が選出され、理事長・副理事長による運営を補佐した³⁸⁾。また、この 12 名の助役を含む理事 48 名の中からワークハウス委員会など必要に応じて委員会 (committee) が組織され、各種業務の実務組織となった³⁹⁾。救貧社の組織は図 1 のように描ける。

救貧社運営の中心をなす 48 名の理事と助役がどのような人々によって担われていたのかということは、組織の性格を知る上で重要である。ブリストル救貧社に関する利用可能な史料には⁴⁰⁾、設立時の理事については名前だけの記載

35) 例えば坂下 (1997) でもキャリーの思想は取りあげられているが、基本的にはホイッグとトーリーの対立の中で、強力なホイッグ支持者としてキャリーの思想を取りあげている。また、Slack (1988) も、革命後のトーリーとホイッグの対立、価値観の動揺の中で救貧社の思想を取りあげている。

36) 井上 (2006), 95 頁。

37) 救貧社設立の意義については、市内救貧行政の統合以外にもモラル・リフォーム運動との関連で坂下が触れている。坂下 (1997)。

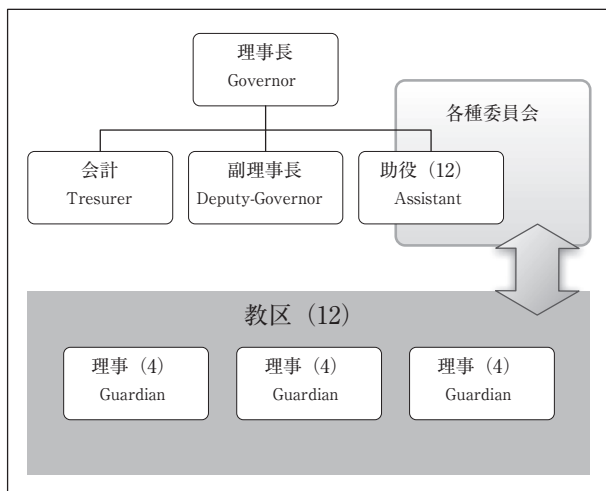
38) 設立時の各教区の理事については、Butcher (1932), pp.45-46 に記載がある。

39) 救貧社設立時には「救貧委員会」と「ワークハウス委員会」が設立された。

40) ブリストル救貧社についての利用可能な史料は、現存する court book を Butcher がまとめたもの Butcher (1932) の他、Johnson が各種史料を収録した著作がある。Johnson (1826)。

で職業についての情報はないが、市民登録簿（Burgess Book）や選挙人名簿（Poll Book）との照合によって職業を推定することが可能である⁴¹⁾。データベース化された市民登録簿、選挙人名簿との照合によって推定された理事の職業構成は、表 1 のようになっている。一見して商業関連の職業にあるものが多く、そのうち 13 名が貿易商（merchant）である。ナイト、エスクワイアなどのタイトルを持つものは 3 名だが、そのうち 1 名は merchant としても記載がある。商業階層が占める 50% という割合は、ブリストル市民に占める割合から言って非常に多く⁴²⁾、ブリストル救貧社が、市民の多くを占める製造業者で

図 1：ブリストル救貧社の組織図



注：組織図はブリストル救貧法の記述から作成した。「各種委員会」は救貧社設立時には「救貧委員会」と「ワークハウス委員会」が設立されている。また、各種委員会は必ず 2 名以上の助役が含まれていなければならなかった。12 名の助役は、12 教区 48 名の理事の中から選出された。
出所：Butcher (1932), pp.179-185.

41) ここでは主に市民登録簿（Burgess Book）と 1722 年選挙人名簿（Poll Book）を MySQL を用いてデータベース化し、氏名で照合した。市民登録簿には 50579 名、選挙人名簿には 3577 名の氏名と職業などの情報が記載されている。

42) ブリストル市民の職業構成を最もよく示すと思われる市民登録簿では、市民の職業構成は商業従事者が約 29%、製造業者が 57%、ジェントリ、専門職、聖職者が 7%弱となる。

はなく、貿易商を中心としたいわゆる商業エリート層、しかもクエーカーなどの非国教徒を多く含む集団によって運営がなされていたことを示している。また、理事の中でも特に12名の助役になったものは、救貧社運営のまさに中核であった。表2によれば、助役のほとんどが貿易商であり、製造業者は1名だけである。ブリストル救貧社はまさに貿易商を中心とした商業エリートによって運営されていた。運営者が従来の救貧行政を担ってきた国教会の聖職者層と異なっているという点は、後に見るように大きな性格の違いを生んでいる可能性がある。

救貧社の運営は、地方特別法で認められたように、救貧税の徴収と各種寄付によって成り立っていた。徴収できる救貧税は、ブリストル救貧法で救貧社設立以前の3年間に徴収された額を超えない額に制限されたため⁴³⁾、1696年は

表1：理事の職業構成

分類	人数	%
商 業	24	50.0
上流階層	2	4.2
製 造 業	9	18.8
専 門 職	5	10.4
不 明	8	16.7

出所：Butcher (1932), pp.45-46 から理事の名前を参照し、市民登録簿、選挙人名簿に基づくデータベースと照合した。市民登録簿は Bristol & Avon Family History Society (2004)、選挙人名簿については Wardley, Griffiths & Ramsey (2000) を参照した。

注：「商業」の内訳は、merchant (12), grocer (5), mercer (3), linen draper (3), vintner (1)。「上流階層」は esquire (2)。「製造業」は cooper (2), soap maker (2), brewer, cloth maker, distiller, dyer, smith 各 1。「専門職」は surgeon (3), mariner (2)。また、非国教徒の割合については確たる数字は得られない。

表2：助役の職業構成

分類	人数	%
商 業	9	75.0
上流階層	2	16.6
製 造 業	1	8.3
専 門 職	0	0.0
不 明	0	0.0

出所：Butcher (1932), p.45-46 から集計した。

43) Butcher (1932) にブリストル救貧法全文が収められている。法で決められた徴収額の上限に

年額£2376 までの範囲で徴収できた。設立後の 10 年間で見ると、救貧社の救貧税徴収額は毎年£2300～2400 であり、年によってばらつきはあるものの、収入の 8 割前後が救貧税によっていた。また、支出については、1800 年以前の記録は現存していない。ただし、1820～1822 年の 3 年間ブリストル救貧社の理事長を務めたジェームス・ジョンソン (James Johnson) が著した著作によれば、設立当初の 1 年あまりの期間の支出額はワークハウスの建設費用£5000 などを含めて約£9412 に上るものの、そうした支出の多くは寄付や議会からの借入れによって賄われていたとされている。院外・院内の救貧に用いられた金額だけを見れば、その支出額は 1696 年から 1701 年の平均で、救貧税収入とほぼ同じ年に£2400 を超えない程度に抑えられているとされている⁴⁴⁾。

3. 救貧を巡る意識

(1) ジョン・キャリーと設立の理念

このようなブリストル救貧社の設立に、最も大きな貢献をなしたのは、請願提出に主導的な役割を果たしたジョン・キャリーである。キャリーはブリストル出身の貿易商だが、貿易や救貧について多くのパンフレットを著しており、著述家としても有名であった。キャリーは救貧社の設立と共にセント・ジェームス教区担当の理事となり、12 人の助役の一人となった。また、いくつかの委員会にも参加しており、設立後も実際の運営の中心にいたことが窺える。

救貧社による救貧行政の運営方針のうち、最も従来のそれと異なっていたのは、ワークハウスの運営についてであろう。ワークハウスは設立直後にホワイトホールとミントに設立されるが、従来のワークハウスでの労働が、かなりの程度懲罰としての意味合いをもっており、しばしばワークハウスが「恐怖の家」と呼ばれていたことを考えれば、ブリストル救貧社のワークハウス運営方針はそれとは全く異なっていたと言えるだろう。1717 年に書かれたキャリー

については、Butcher (1932), p.184 を参照。

44) Johnson (1826), p.25。なお、ワークハウス設立の資金などを含めた 5 年間で£9412 の支出は、主に寄付、理事からの借入金、市議会からの借入金で賄われているとされている。1800 年以降については、Johnson (1826), pp.165-172 にまとめられている。

の著作の中には、彼がワークハウスをどのようなものとして捉えていたかを示す記述が見られる。以下からは、主にキャリーの著作からの引用によってプリストル救貧社の救貧についての理念を確認したい。1717年に公開されたキャリーの著作には、以下のような記述が見られる。

「怠惰は我々の中に広がる全ての悪徳の原因であり、労働以外の方法で生活しようとする者は悪徳に耽り、よくない結果をもたらす。だが、若者を勤勉によって生きる喜びに目覚めさせることができれば、また彼らが他人の手に頼らず、自らの力によって生きることができれば、それは彼らに誠実な努力 (honest endeavor) と真のブリティッシュ・スピリット (true British Spirit) を身につけさせることに繋がる。それは、彼らに信用と評判を得させ、彼ら自身の生活を良くする機会をもたらすだろう」⁴⁵⁾

「額に汗して働きパンを得ること、これが幸せな状態である」⁴⁶⁾

「働けない者については、救貧院 (alms-house) は良い贈り物になるだろう。だがそれは、怠惰な物乞いを養うためでも、裕福な教区の気休めのためのものでもなく、働けない高齢者や、貧しい若者に教育を施すための場所である」⁴⁷⁾

しばしば指摘されるように、フランスとのアウクスブルク同盟戦争が継続されていた当時であって、知識階層の間で国力の維持に対し貧困者の雇用は重要な方策と思われていたことは事実である⁴⁸⁾。また、増え続ける救貧税負担に対し、貧困者の自立を促すことは経済的意味においても大きな恩恵があると考えられていたのも事実であろう⁴⁹⁾。だが、キャリーが「これらのことを通じて、彼らが礼儀正しき (civility) を身につけ、働くことを愛して欲しい」と書

45) Cary (1717), pp.111-112.

46) Cary (1717), p.103.

47) Cary (1717), p.112.

48) 井上 (2006), 94 頁。

49) 坂下 (1997), 7 頁。

いたように⁵⁰⁾、彼が国の経済とともに貧困者の真の救済を考えており、本当の救貧とは貧困者の自立を支援することであると結論に至っていたことが理解できる。

(2) 救貧社への批判

ブリストル救貧社が、教区から救貧行政を奪う形で設立されたことは、かつて救貧行政を担った階層からの批判を招いていたであろうことは想像に難くない。実際、従来救貧行政を担っていた教区委員と救貧監督官は、その仕事を奪われて救貧税の徴税のみの担当となったため、しばしば徴税拒否を起こしたことが記録に残されている⁵¹⁾。こうした行動を含めた救貧社への批判は、通説的理解ではポール・スラックが指摘するように、名誉革命以降のトーリーとホイッグの対立、また非国教徒主導で運営されていた救貧社に対する国教徒の反感によるものであるとされてきた⁵²⁾。だが、当時の出版物からは、そうした党派対立に起因するものとは別に、救貧に対する価値観の相違が影響していたことが感じられる。1711 年に公開されたある匿名のパンフレットは、そうした救貧社を批判するものとして代表的な意見が述べられている⁵³⁾。

「議会の通過によって、救貧は教区委員と救貧監督官の手からコーポレーションと称するものへと代わった。彼らはワークハウスを設立し、この数年間いくつかの製造業を進めようとしてきたが、見るところ、それには成功していない」⁵⁴⁾

「貧民を救うということについて、“ワークハウス” などという名前のもの

50) Cary (1700), p.11.

51) 例えば Court Book の 1697 年 1 月 19 日, 1698 年 6 月 9 日に教区委員による徴税拒否の記載がある。Butcher (1932), p.54, p.64。

52) Slack (1988), pp.196-198。なお、トーリーとホイッグの対立は、思想的な相違があったと言うよりは、単純な党派対立によるものだったように思われる。anonymous (1711) にも、ブリストル救貧社がホイッグのためのものであると非難する記述が見られる。anonymous (1711), pp.8-9。また、ODNB によれば、ジョン・キャリーはホイッグ支持の立場に立つ論者として知られていた。

53) anonymous (1711)。

54) anonymous (1711), p.2。

は、かつての方法よりも良いものなのだろうか？ 貧民を救うということは、（貧困者に労働させた金によってではなく）我々自身の資金によって行わなければならない。そして、それを行うには、救貧社の理事たちがかつての教区委員よりも良いとは思えない」⁵⁵⁾

こうした記述に見られるように、かつて救貧行政を担ってきた人々は、貧困者を真に救済することとは、自らの資金を分け与えることであると理解していた。そのため、貧困者を労働させることは搾取に他ならず、真の救貧ではないと考えていた。救貧に関するこの考え方の相違は、救貧社の収入の使い途の不明瞭さと合わせて、パンフレットの中にしばしば感じ取れる。

(3) 救貧を巡る意識と階層意識

救貧社に対する批判が、政治的・宗教的価値観の違いに基づく部分が多かったとしても、こと「貧民を救うとはいかなることか」という点に限ってみれば、急速に台頭しつつあったミドリリング・ソートの中核をなす貿易商が考えた「救貧」と、従来の秩序の中で救貧にあたってきた人々との考え方は大きく異なっていたと言えるだろう⁵⁶⁾。このことは、貿易商を中心とした商業エリート層の中に、自らは従来の人々とは異なっているという意識をもたらししていた。1711年のパンフレットの中で、キャリーは以下のように記している。

「我々のこどもたちはとてもまじめに教育され、労働の喜びを知り、自立している。この街の様相は変わった。若い芽は高潔で勤勉な世代をつくり出していくだろう」⁵⁷⁾

自ら労働して生活することを規範とする階層が「街の様相を変えた（Face

55) anonymous (1711), p.4.

56) 長期的な福祉政策の変化を扱ったものとして、Fideler (2006)。また、この時代の慈善のあり方について論じたものとして、Andrew (1989) が挙げられる。また、邦語では長谷川 (2012)、中西 (1979)。長谷川は福祉政策を概観する中で国家、教会とともに福祉を担った「ボランティアズム」について触れている。長谷川 (2012), pp.30-31.

57) Cary (1700), pp.19-20.

of our City is so Changed)」ことは、従来とは異なる新たな意識をもった集団の登場を意味している。キャリアはこうした集団が救貧社での活動を通じて拡大され、次世代へと受け継がれていくことを期待していた⁵⁸⁾。また、キャリアが最も重要だと考えていた「自立」や「労働」といった特徴は、「独立して商売を営む世帯」⁵⁹⁾ というミドリング・ソートの定義に等しい。キャリアが最も大切だと感じていた意識は、「ミドリング・ソート」の紐帯そのものであった。ブリストル救貧社の活動を通して顕在化した「救貧」に対する考え方の相違は、ワークハウスでの活動を通じて新たな意識を持つ集団を形成し始めていたと言えるだろう。

4. おわりに

近世イギリスの「ミドリング・ソート」の把握の困難は、それが経済的・法的・政治的な区別無く存在している点に起因している。そのため、「ミドリング・ソート」がどのような存在であったのかを把握するためには、その紐帯である文化的特質、価値観、地域社会での役割、あるいは「救貧」を含めた特定の事物についての意識の違いを明らかにする他はない。その意味で、ブリストル救貧社の設立が顕在化させた「救貧」に対する意識の違いは、ブリストルの商業エリート層の意識のありようを明らかにしていると言える。

本稿での検討を通じて明らかになったように、「救貧」に対する考え方は、救貧社の中核を担った商業エリート層とかつて救貧行政を担ってきた階層とは大きく異なっていた。こうした考え方の相違は、その違いを認識することを通じて、ある種の集団としての自意識に繋がったのではないだろうか⁶⁰⁾。

58) Butcher (1932) には、ブリストル救貧社に収容された若者の主要な出口の一つが、徒弟奉公であったことが触れられている。これには成功した例も失敗した例もあったようだが、少なくともキャリアを始めとした救貧社の理事たちは、貧民の若者を独立した商工業者に育成しようとしており、ある程度成功を推されていたことは事実である。Butcher (1932), pp. 21-24.

59) Barry (1994), p.4.

60) 本稿での検討は、キャリアと従来救貧行政を担った階層の間に見られた意識の違いが互いを他者と認識させ、社会層の差別化につながった点を指摘するに留まっている。こうした意識の差が、ブリストル以外の地域やキャリア以外の人物にも見られたかどうかを検討するには、いままじ一般化した議論が必要となろう。同時代人の思想家とキャリアの比較、また時系列での変化の中でキャリアの思想を位置づけることは、今後の課題である。

「ミドリング・ソート」のありようを明らかにしようとする歴史研究では、自発的結社への参加を通じてある種の集団としての意識形成がなされる過程を明らかにしようとしたもの⁶¹⁾、また消費行動の側面からその意識に迫ろうとするもの⁶²⁾、当時の定期刊行物の中に意識を見出そうとするものなど⁶³⁾、多様な視点から階層意識の形成過程を解明しようとしたものが蓄積されつつある。だが、例えば労働者階級の形成過程を扱ったエドワード・トムソンが明らかにしたように⁶⁴⁾、自覚的な階級意識が日々の様々な経験の蓄積の結果としてもたらされるとするならば、未だ「ミドリング・ソート」の意識形成過程を明らかにする研究は十分とは言えない。近世イギリスの「ミドリング・ソート」を把握するには、その存在の「ミドルクラス」への連続・非連続を含めて、さらなる事例の蓄積が必要であろう。

参考文献

・資料

- Anonymous (1711), *Some Considerations offered to the Citizens of Bristol, relating to the Corporation for the Poor in the said City*.
Bristol & Avon Family History Society (2004), *Bristol Burgess Books vol. 1 to 21 Index & Transcripts 1557-1995* (CD-ROM), Marathon.
Butcher, E. (1932), *Bristol Corporation of the Poor Selected Records 1696-1834*, Bristol Record Society.
Cary, John (1695), *An Essay on the State of England in relation to its Trade, its Poor and its Taxes, for carrying on the present war against France*.
Cary, John (1700), *An Account of the Proceedings of the corporation of Bristol in execution of the act of Parliament for the better employing and maintaining the Poor of that city*.
Cary, John (1717), *An Essay, towards Regulating the Trade and Employing the Poor, on this Kingdom*.

61) Smail (1994).

62) 特に経済史研究の分野では、消費行動の中にミドリング・ソート独自の意識を見出そうとする研究はいくつかある。道重 (2008), Vicary (1993) など。

63) Harris (1998).

64) Thompson (1964).

Johnson, James (1826), *Transactions of the Corporation of the Poor, in the City of Bristol, during a period of 126 years.*

The Bristol Poll Book, Being a List of Persons who voted at the General Election for Members to serve in Parliament for the City and County of Bristol, 1722, (Cengage Learning, *The Eighteenth Century Collections Online* [web database]).

Wardley, P., Griffiths, D., Ramsey, K., [eds.] (2000), *Bristol Historical Resource* (CD-ROM), University of West of England.

・文献

Andrew, D. T. (1989) , *Philanthropy and Police: London Charity in the Eighteenth Century*, Princeton University Press.

Barry, J., Brooks, C. [eds.] (1994), *The Middling Sort of People: Culture, Society and Politics in England, 1550-1800*, Basingstoke; Palgrave Macmillan. (山本正監訳『イギリスのミドルング・ソート — 中流層をとしてみた近世社会』昭和堂, 1998 年)

Barry, J. (1996), 'Bristol Pride: Civic Identity in Bristol c.1640-1775', in Dresser and Overshaw, *The Making of Modern Bristol*, Redcliff Press.

Brewer, J. and Porter, R. [eds.] (1993), *Consumption and the World of Goods*, Routledge.

Dresser, M. and Overshaw, P. [eds.] (1996), *The Making of Modern Bristol*, Redcliff Press.

Earle, P. (1989), *The Making of The English Middle Class*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Fideler, P.A. (2006), *Social Welfare in Pre-Industrial England: The Old Poor law Tradition*, Palgrave Macmillan.

French, H. (2007), *The Middle Sort of People in Provincial England 1600-1750*, Oxford U. P.

Harris, B. (1998), 'Praising the middling Sort?' in Kidd & Nicholls (eds.), *The Making of the British Middle Class?* Sutton.

Kidd, A and Nicholls, D. (1998), *The Making of the British Middle Class?* Sutton.

Kidd, A. and Nicholls, D. (2000), *Gender, Civic Culture and Consumerism: Middle-Class Identity in Britain, 1800-1940*, Sutton.

Minchinton, W.E. (1957), *The Trade of Bristol in the Eighteenth Century*, Bristol Record Society.

- Morgan, K. (1993), *Bristol and the Atlantic Trade in the Eighteenth Century*, Cambridge U. P.
- Sacks, D. (1991), *The Widening Gate Bristol and the Atlantic Economy, 1450-1700*, University of California Press.
- Slack, P. (1988), *Poverty and Policy in Tudor and Stuart England*, Longman.
- Smail, J. (1994), *The Origins of Middle-Class Culture Halifax, Yorkshire, 1660-1780*, Ithaca and London: Cornell U.P.
- Stembridge, P.K. (1998), *The Goldney Family A Bristol Merchant Dynasty*, Bristol Record Society.
- Thompson, E. (1964), *The Making of the English Working Class*, Pantheon Books (市橋秀夫, 芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社, 2003 年)
- Wrightson, K. (1994), 'Sorts of People' in Tudor and Stuart England, in Barry & Brooks (eds.), *The Middling Sort of People: Culture, Society and Politics in England, 1550-1800*, Basingstoke; Palgrave Macmillan.
- Vicary, A. (1993), 'Women and the World of Goods: a Lancashire Consumer and her Possessions, 1751-81', in Brewer and R. Porter [eds.], *Consumption and the World of Goods*, Routledge.
- 井上克洋 (2006) 「プリストル救貧法下におけるワークハウス 1696-1722」『ソシオサイエンス』vol.12
- 岩間俊彦 (2008) 『イギリス・ミドルクラスの世界 ハリファクス, 1780-1850』ミネルヴァ書房
- キース・ライトソン (中野忠訳) [1991] 『イギリス社会史 1580-1680』リプロポート
- 小山路男 (1962) 『イギリス救貧法史論』日本評論新社
- 坂下史 (1997) 「名誉革命体制下の地方都市エリート ―プリストルにおけるモラル・リフォーム運動から―」『史学雑誌』vol.106
- ジョナサン・バリー, クリストファ・ブルックス編 (山本正監訳) [1998] 『イギリスのミドルリング・ソート ―中流層をとしてみた近世社会』昭和堂
- 関口尚志, 梅津順一, 道重一郎編 (1999) 『中産層文化と近代: ダニエル・デフォーの世界から』日本経済評論社
- 中西洋 (1979) 『日本における「社会政策」・「労働問題」研究: 資本主義国家と労使関係』東京大学出版会
- 長谷川貴彦 (1996) 「イギリス産業革命期における都市ミドルクラスの形成 パーミンガム総合病院 1765-1800」『史学雑誌』105 編 10 号
- 長谷川貴彦 (2012) 「近世化のなかのコモンウェルス」高田実, 中野智世編『近代ヨーロッパの探求 15 福祉』ミネルヴァ書房
- 道重一郎 (2008) 「18 世紀ロンドンの小売商と消費社会 ―服飾小物商 milliner の活動を中心に―」『経営史学』第 43 巻 1 号